

# 慕容雪村『成都よ、今夜は俺を忘れてくれ』試論

——「欲望」と「虚無」のリアリズム——

高屋 亞 希

## 1 はじめに

慕容雪村<sup>1)</sup>が2002年、ネット上で連載発表した長篇小説『成都よ、今夜は俺を忘れてくれ』<sup>2)</sup>(以下『成都』)は、作者と同じ1970年代生まれの若者たちを等身大でリアルに描いたとして、大反響を呼んだ。小説は発表とほぼ同時期にあたる、2001年春からクリスマスイブにかけての1年弱を背景にしている。成都のやり手ディーラー陳重がセックスや金銭などさまざまな誘惑に「欲望」のまま流されることで、妻や友人などこれまで大切にしてきた人間関係を蔑ろにし、そのことに罪悪感を覚えながらも結局は、その全てを失うというストーリーである。

各人が社会的規範やモラルを無視し、ひたすら自身の「欲望」を追求することによって、規範やモラルそのものが空洞化し、人生から目の前にある「欲望」以外の存在意義を奪っていく、という「虚無」的な『成都』の同時代認識は、1980年代生まれの作家たちにも共通する<sup>3)</sup>ものと言えよう。但し1980年代生まれの作家の多くにとって、規範が空洞化した社会の「虚無」状態は他人がつくりだした所與のものであり、そのことへの憤りは示されるものの、自らもその状態をつくりだす当事者だという意識は一般に乏しい。これに対して1970年代生まれ世代を描いた『成都』は、自らの「欲望」との関わりにおいて「虚無」を描いており、現状を招いた当事者としての意識が明瞭である。

この違いの背景には、兩世代が社会参加する時期のズレが作用しているだろう。市場化の進展に伴い、個々人の「欲望」を社会全体で調節する機能の欠陥が露わになり、社会規範の形骸化が深刻化していくのが1990年代半ば以降のことである。1970年代生まれ世代はこうした社会風潮と軌を一にして社会参加を果たした<sup>4)</sup>のに対し、1980年代生まれ世代は社会規範の崩壊が完全に深

刻なものとなってから社会参加を模索しなければならなかったことが、両者の同時代認識の違いを生んでいるものと推察される。

『成都』は赤裸々な「欲望」の描写で世間の注目を集めた<sup>5)</sup>が、本稿では1980年代生まれ世代との違いを考えるため、この「欲望」を「虚無」との関係において考察する。その際、個人的「欲望」の充足がいかに関係に対して「虚無」をもたらすかという点を確認するとどまらず、「虚無」化された社会において個々人の「欲望」がどのように構造化されているかという点についても、分析を行う予定である。なお小説は、陳重の放埒な性的「欲望」がもたらす妻との関係破局や、金銭的「欲望」を原因とする友人との関係破綻など、複数の「欲望」が相互に関連しながらストーリー展開するが、本稿では紙幅の関係上、陳重と大学時代以来の友人である李良と王大頭の間に、友人関係を中心に検討したい。

## 2 「欲望」による友情の「虚無」化

職場のライバルが支社長に抜擢<sup>6)</sup>され、自分がその下で働かなくてはならなくなったことに苛立つ陳重が憂さ晴らしをしようと、先物取引で成功している資産家で親友の李良宅を訪れる場面から、小説は始まる。李良と一緒に麻雀卓を囲んでいた葉梅という初対面の女性に引き合わされた途端、陳重はそのセクシーな體つきに目をとめ、性的「欲望」を抱く。更には麻雀で給與半月分の戦果<sup>7)</sup>を手にするると、“とたんに内心すつきり” (p4) し、晝間の苛立ちもいつしか消える。そして上機嫌のまま、葉梅を車で自宅に送り届ける途中、半ば強引に誘惑して関係を結ぶことに成功し、苛立ちで始まった夜は戦果を得た喜びのうちに更けていく。

ここからは、内心見下していたライバルから命令支配される立場に轉落した屈辱的現実が、目の前にぶらさげられた金銭とセックスという「欲望」の対象を、ちょっとした勝負のすえに戦果として手に入れ、組み敷いて支配する行為の過程で、一時的に忘却されていく構圖が見て取れよう<sup>8)</sup>。こうした支配と被支配をめぐる陳重の代償的行為は、電話での妻からの食事の誘いをにべもなく拒絶する行為と平行して行われている。戦果を得て気分轉換する行為が最優先

される中、自分に差し出されていた妻からの愛情や信頼といった感情は背景へと後退して無視され、陳重が意圖したものではない<sup>9)</sup>にも関わらず、妻の存在は陳重の氣分次第で容易に踏みじることが可能な、モノと化している<sup>10)</sup>と言えるだろう。

モノとして扱われていることは葉梅も同様で、陳重は性的「欲望」の対象としてしか葉梅を見ていない。しかし葉梅自身が、モノではなく感情を持った生身の存在であることを、その不機嫌な態度で示し續ける點は興味深いところである。情事が終わった後、葉梅の冷淡な態度に“ご満足いただけなかったようだ” (p7) と、陳重は男としてのプライドを傷つけられ、少しばかり意氣阻喪する。

なお小説全篇を通して、陳重は大勢の女性と肉體關係を持つが、取引先の接待以外では、高級クラブではない手頃な値段で遊べる風俗店の女性か、行きつけの食堂の女將など肉體労働者が大半である。陳重はこれらの女性の肉體で自身の「欲望」を満足させる一方、女性たちの社會階層や生活習慣、趣味などを輕蔑 (p108～109 等参照) しており、これらの女性をモノとして扱う意識の背景となっている。また自身の經濟力では分不相應な高級クラブで遊ぶことを羨望しており、社會的ヒエラルキーの下位をモノとして支配し「欲望」をぶつける一方、ヒエラルキー上位に對しては羨望や嫉妬の視線を向けるだけで、「欲望」が實際に行使されない傾向が歴然と認められる。

陳重にとって些か悪い後味に終わった葉梅との情事は、彼女が親友の李良のフィアンセであると判明したことから、性的「欲望」のはげ口としてではなく、その感情を尊重すべき對象として扱わざるを得なくなる。葉梅との婚約を李良から知らされショックを受けた直後、陳重は更に葉梅からも電話で妊娠の事實を告げられる。電話口で罵られた陳重は、“この數年、自分をこのように罵る奴などいなかった” (p17) と怒りをおぼえるが、その怒りのみこむしかない。李良や妻に氣付かれないうちに、近郊の樂山まで葉梅に付き添い、墮胎手術を受けることにする。

葉梅の妊娠は本當に煩わしかった。これまでも何人かの女を妊娠させたことはあったが (中略)、そいつらは簡単に處理できた。女たちに何千元

か渡せば、もうみんな満足して墮ろしてくれた<sup>11)</sup>し、俺が顔を出す必要も全くなかった。だけど今回は何ととっても親友のフィアンセだ。李良に對しては本當に面目ない。(p20)

李良との友情を裏切る行爲であった點のみが、陳重に自身の非として意識されている。ここには、葉梅という女性が置かれた苦境や心中を思いやり、妊娠させたことに對して申し譯ないと思う感情は一片も見あたらない。寧ろ面倒に巻き込んだ葉梅には煩わしさを感じるばかりなのが讀み取れよう。

それに對して墮胎手術のため、陳重と一泊ドライブに出かける葉梅の格好は、“ピンクのぴっちりしたノースリーブ”(p20)で、セクシーな體型を強調するものである。“顔を赤らめて”(p20)車に乗り込んだという描寫や、“李良にどう言ったんだい?”(p20)という陳重の問いかけに對し、“アンタはアタシを構っていてよ”(p20)と答えていることから、彼女が陳重との關係を肉體以上の精神的結びつきへ變えたいと思っていることが伺える<sup>12)</sup>。しかし陳重はそうした彼女の氣持を薄々感じつつも、關係をこれ以上のものに變えるつもりはない。陳重は内心、彼女に輕蔑を感じながら、無言のままドライブを続ける。

樂山での二人きりの夜、今度は葉梅から陳重をセックスに誘い、半ば強引にベッドに押し倒すが、陳重は“強姦されているような感覺”(p23)だとし、葉梅が肉體を通じて自分にぶつける激しい感情から身を引き離す。その後、情事が終わってから葉梅は號泣するが、小説中盤で明かされる李良がインポテンツだという事情を考えあわせると、葉梅は自分に觸れようとしない李良との結婚<sup>13)</sup>にどこか不安や不満を感じ、そこから逃げ出す出口として、陳重を見ていたことが想像される。

しかし、こうした言葉にならない葉梅の肉體による叫びは、陳重に“粗野な女”(p101)という印象を與えたに過ぎず、二度までも肉體關係を持ったことに對して、李良への申し譯なきが募るばかりである。女を肉體というモノの領域に押し込め、自分の性的「欲望」をぶつけ支配しようとする陳重の優越的な主體意識が、肉體を介して自己主張をぶつける女の予想外の行動によって揺らぐ。そうした自身の主體領域に踏み込んでくる女の振る舞いを、“粗野”と陳

重が解釋している點は實に興味深い。

結婚に躊躇を見せていた葉梅と李良の結婚生活は當然、最初からうまくいかず、ケンカが絶えない。結局はケンカの擧げ句、葉梅は電話で男と話をつけ家を出て行く。その苛立ちをぶつけるため、李良は自分だけが相手に貞操を守る必要などないから、商賣女を調達しろと陳重を呼びつける。陳重は行きつけの接待用高級クラブにつれていくが、李良はクラブのママを指名してわざと嫌がらせの態度をとる。

姚萍 [=クラブのママ] の顔の笑みが次第にこわばり、陰鬱に俺をにらみつけている。李良を引っ張ったが、亂暴にふりほどかれた。李良はその場の雰囲気などお構いなしに、どんどん値をつり上げ續けている。“2萬！”姚萍の顔がたちまち蒼白になった。優に1分の時間が流れてから、彼女は口を開いた。“よろしいでしょうか。お客様がお金持ちでいらっしゃるのは分かりました。しかし、私ども商賣女の前でひけらかす必要などございません (中略)”俺は慌てて作り笑いを浮かべ、ママ、怒らないでやって下さい、こいつはこの手のことに疎いものだから、悪く思わないでやって下さいと言った。言い終わらないうちに、李良がいきなり獅子のように怒り狂い、俺に平手打ちをお見舞いした。“畜生！お前が俺の女房とやった時、どうして俺がこの手のことに疎い、と言わなかったんだ！？” (p103)

陳重と葉梅の關係を李良が氣付いた経緯は、小説中に書かれていない。ただ披露宴の席上、陳重ら參列者が性的な話題で新婦をからかつてはやし立てた際に、葉梅が陳重に對して怒りを露わにするという事件が起こっている。周囲は二人の關係をいぶかる程度であつたが、自身のインポテンツが原因で葉梅が別の男のもとへ出奔するにおよび、李良は遡って披露宴での事件の背景にある二人の關係を悟った、ということなのかもしれない。

インポテンツの李良は妻に捨てられた内心の苛立ちや憤りを晴らそうにも、陳重のように性的「欲望」の發散によつて解消することもできない。そのため、資産家である李良は礼びらで頬を叩くようなやり方で、指名できないママ

を指名することに執心し、自身の支配力を見せつけようとしたのだろう。しかし、若き日の美貌と超絶的なテクニックで業界の名聲を勝ちとり、今は第一線から退いた“誇り高い”（p102）ママは、金次第で支配できるモノとして自分を賣り渡すことを断固拒絶する。

恣に自分が支配できるモノを手に入れられなかった李良は、行き場のない苛立ちをついに陳重にぶつけてくるが、そのきっかけが性的なことに“疎い”という陳重の言葉に反応してのものだったことは、重要かもしれない。つまり李良は、友情に背いて妻と不倫したという事実に対してだけでなく、陳重が自分の性的無知を見透かした<sup>14)</sup>上でそれにつけ込み騙していた、即ち自分を都合よく支配できるモノとして利用してきたという意識を見ていた可能性があるだろう。支配と被支配という関係が浮上した途端、對等な立場で尊重しあう友情という精神的價値はその實態を失い、「虚無」と化す<sup>15)</sup>。

いずれは李良から資金援助をうけて、自分の會社を興したいと夢想していたことも、また麻雀などさまざまな機會に金を無心し、總額で32,000元（p187）の借金を重ねてきたことも、李良との間に友情があるという前提のもとでは、困った時は互いに援助するという友情の現れ、と意味づけられるだろう。しかし、その友情そのものの存在が疑問視され不確かになった途端、そこにあるのはただ相手を御しやすいモノとして利用する、利用する者とされる者、支配する者とされる者の関係でしかない。

友情が先か利用が先かという結論のでない問いに、“もし李良があればほど金持ちでなかったら、それでもこうして彼を重視しただろうか？”（p123）と自問した陳重は、“自分にも分からない”（p123）と答えるしかない。かくして、目の前にある金銭的あるいは性的「欲望」の充足が、友人を含む他者をモノ化し、兩者の關係から友情などの精神的意義を奪い、「虚無」化してしまう<sup>16)</sup>のである。

### 3 「虚無」感による「欲望」への傾斜

葉梅との不倫が露見して以來、陳重は何度となく許しを請おうとするが、李良は耳を傾けようともせず、全ての氣遣いを拒絶し、二人の友情の存在を否定

(p219 等參照) する。しばらく音信がない中、もう一人の大學時代以來の親友である王大頭から、李良が麻薬を常用していると聞かされる。陳重は慌てて諦めるよう説得するが、李良は取りあわない。

李良に麻薬をやめるよう説得するのは難しかった。李良は何もかも全てを分かった上で、究極的な問題をストレートに議論してきた。“もし1ヶ月しか生きられないとしたら、麻薬をやれるかい？” 眞剣に考えた末にやれると答えると、李良は笑った。(中略) 俺だったら寧ろ性的絶頂の最中、1秒でポックリ逝きたいものさ。カンカン照りの中、鋏を擔いで一生苦しむのはまっぴらだからな。(p142)

李良の餘命が1ヶ月しかないということではない。恐らく、葉梅や陳重は愛情や友情の名のもとに、自分を都合よく支配できるモノとして利用したに過ぎなかったと認識したのを契機に、李良には未來に向けて保つ努力をすべき関係が、この社會から全て失われてしまったという状況の比喩なのだろう。つまり、友情や愛情などといった精神的價値が「虚無」と化したことで、李良自身が社會に生きる意義も「虚無」化し、何ら價値を見出せなくなったということである。

しかも陳重と異なり、インポテンツの李良には眼前の性的「欲望」を満たすという戦果を得ることで、支配する者とされる者が互いに繰り広げる、こうした「虚無」的現實から目をそらすこともできない。生きることには價値を見出せず、“全てを分かった上で” 間接的な自殺行爲に身を委ねている者に向かって、“健康を害する”(p142) という陳重の説得が、何の効力も持たないのは當然だろう。

また引用で注意すべきもう一つの點は、腹上死を本望とする陳重も實は李良と同じく、未來に向けた永續的關係の維持を志向しない「虚無」的な人生觀を共有し、刹那的な自殺行爲に身を任せていることにある程度、自覺的だということである。一生が單に“苦しみ”の連續の過程に過ぎないのであれば、不確定きわまりない未來に向けて現在の人間關係に配慮し、目の前にある「欲望」をセーブすることは不必要なことであろう。性的快感でこの現實から目をそら

している最中に“ポックリ逝きたい”という陳重の理屈が伺えるが、これもまた一種の自殺行爲と呼べなくもない。「欲望」が現実の「虚無」化を招くのみならず、「虚無」という現実の恐怖から逃れるため、「欲望」への傾斜が一層加速している構圖が見て取れよう。

李良の間接的自殺行爲と向き合うことで、陳重は大學時代から李良が自殺願望<sup>17)</sup>を抱いていたことを思い出す。“大の男たるもの、己の生死は己で支配すべきだよ。殺されるより、自殺した方がましさ” (p154) という李良のたぶんにヒロイックな言葉は、改めて今の李良が置かれている文脈に照らしてみると、當時とは異なった意味へ変化していることが理解される。他人からモノとして利用され、支配され、捨てられるばかりの社会的ヒエラルキーの下位にとって、唯一“支配”できるものが己の生命のみだ、という諦念にも似た現実認識<sup>18)</sup>が浮かびあがってくるのではないだろうか？

『成都』では全篇を通して、自分は明日にはどうなっているか分からない、不安定で危険極まりない立場に置かれているという現実認識が繰り返し現れる。例えば、食事の席で陳重の義兄が、都市管理局職員<sup>19)</sup>に商賣道具一式を没収された露天商が、小競り合いで誤って投げた石で職員を殺し、一家心中に追い込まれた事件を話題にした後、食卓を囲んでいた一家は沈痛に口を閉ざす。

義兄は言葉をかみしめるように、今は危機感に溢れた時代だから、誰も明日を預言しようとしない、全ては假初めであり、本当のものは金しかないと言った。金と聞いて、俺はいてもたってもいられなくなった。昨日、會計が俺個人の〔會社からの借入金の〕計算書をプリントアウトしてくれたのだが、受け取ってちらっと見たら、頭の中がグアーンと鳴った。俺名義の借金が284,000元あまりになっていた。(p86)

法的に保護されないまま細々とした小商いで生計をたてる露天商が、ヒエラルキー上位にある都市管理局職員の恣意的な論理一つで、ある日突然、生きる糧を奪われ、命まで絶たれていく「虚無」的な現実に、陳重の一家は言葉を失う。明日には「虚無」と化すかもしれないこの現実は假初めのものに過ぎず、



今この瞬間に手にする金、即ち「欲望」のみが唯一確かなものだという義兄の臺詞は、「虚無」という現実の恐怖から逃れるため一層「欲望」へと傾斜する、陳重の認識そのものでもあるだろう。『成都』が陳重という「欲望」に溺れる一人の男の人生を超え、同時代社會全體を批評の射程におさめる箇所と言えるかもしれない。

この時、陳重にとって「虚無」への恐怖はきわめて切實である。金の一言で引き戻された現実には、28萬元以上にもおよぶ會社の公金流用が來月の會計監査で會社上層部に知られると、處分は免れないだろうというものであったからだ。私的流用を重ねてきた會社の金を何に使ったのか、今や陳重自身にも分からない。恐らく“麻雀でなければ女” (p86) というその場限りの「欲望」を満たすため、蕩盡を續けた結果の累積がこの數字なのだろう、と陳重は推測する。

ここで注意すべきは、こうした後先を考えないルーズな「欲望」の追求もやむを得ない結果なのだと、陳重に意識されている点である。小説中で陳重は常日頃、自分が會社に果たしてきた貢献に、自分の給与や評価が見合わないとの不満を漏らしている。また小説ラストで會社を辭めさせられ、これまでの使いこみを清算しなければならなくなった時も、“この數年、會社のために數千萬元の富を稼ぎ出したにも関わらず、自分に残ったのはこんなちっぽけな袋一つでしかない” (p216) と、内心の不満を募らせている。

つまり陳重の意識では公金の私的流用も、會社から都合よくモノとして利用される現実を不公平とし、それに對する意趣返しと位置づけられていたことが推測されよう。會社では自分の價值や努力が正當に評價されない、という一種の「虚無」的な現状への憂さ晴らしに、陳重は役得と才覺を驅使して金錢的「欲望」や性的「欲望」を満たし、ヒエラルキー上位を出し抜いた優越感を手にする。しかしそのことでより一層、現実の立場を危ういものにし、文字通り全てを失う「虚無」に直面するという圖式は實に興味深い。

理不盡な暴力と不公平な現實に黙々と堪え忍ぶ社會的弱者が、生きる術を奪われて思わず都市管理局職員に石を投げつけた行爲と、「欲望」を調節して慎ましやかに暮らすという選擇肢もあった陳重が、ヒエラルキーの上位に對して精神的勝利を追求する行爲とを同列に論じることは難しい。とは言え、両者と

慕容雪村『成都よ、今夜は俺を忘れてくれ』試論（高屋）〔53〕

もに明日をも知れぬ「虚無」的な現実という一点を共有し、陳重の意識で等價と見なされていることは、「欲望」と「虚無」の関係を社會全體の逃れられない運命としてとらえている點で示唆的と言えよう。一般に1980年代生まれ世代においては、「虚無」的な現状への意趣返し行爲のみがクローズアップされ、それが賞賛される傾向<sup>20)</sup>だけに、『成都』のこうした「虚無」への冷めた認識は注目に値する。

自らの才能と努力によって己の未來を切り開く生き方が本格化する1992年の南巡講話<sup>21)</sup>から、小説の背景となっている2001年まで、約十年の歳月が流れている。必ずしも合法性が保障されない状況下で、個人利益を追求する人々は時として足下を掬われ、容易に「虚無」的な現実へと轉落していく。“この社會にあるのは有罪あるいは無罪ではなく、幸運あるいは不運でしかない” (p218) と語る王大頭は、その意味で『成都』に登場する唯一のリアリストと言えるだろう。

#### 4 「欲望」と「虚無」のリアリズム

麻薬所持の現行犯で李良が逮捕される。十年の量刑を覺悟しなければならない事態に、親友で警察官の王大頭は50萬元出せば事件をもみ消せるかもしれない、と陳重を通じて李良に持ちかける。王大頭の指示に従うことで李良は自由の身になるものの、陳重は王大頭が事件につけ込み、50萬元のうち一部を自分の懐に入れたのではないか、という疑念を消すことができない。小説では、王大頭が果たして李良の金を私物化したのかという點は明らかにされていない。とりあえず、陳重自身も李良との友情に背き、彼をモノとして利用した過去があるにも関わらず、金銭的「欲望」から王大頭が同様の行爲をしたのではないかと疑い、かつ許そうとしない點を確認しておけばよいだろう。

その後も陳重は、自己矛盾した態度<sup>22)</sup>をとることを否應なく迫られる。小説後半で職場を追われた陳重は、これまで私的流用した公金を清算するよう、會社から告訴されそうになる。取り調べの警察官が実際に現れるにおよび、陳重は李良逮捕の事件以來しばらく交際を断っていた王大頭に助けを求める。

王大頭に次はどうしたらよいのか尋ねた。大頭はこの時うって變わり冷淡な態度で、俺を長いこと横目で眺めていたが、陰氣な調子で聞いてきた。“俺がお前の金をいただくのは怖くないのか？”決まり悪くなり（中略）、まだ例の件を気にしているのか、あれだって友を思えばこそのことだろう、と言った。（中略）“俺に近寄るな！”と大頭が怒鳴った。“使い道がある時は兄貴と呼ぶくせに、使い道がないとなったら禽獸にも劣る扱いをしやがって、テメエのような友達がいるか？”（p230）

王大頭が駆けつけてくれたことに對し、“やはり大頭は十數年來の友人だ”（p225）とこれまでの態度を一變させた陳重だが、この言葉には一言もない。親友の李良をモノ扱いし利用したと大頭を非難してきたが、當の陳重も日頃は大頭を輕蔑しつつ、都合のよい時だけモノとして利用していることが、この言葉で露呈された格好になったからだ。

そもそも學生時代から、陳重と李良は王大頭を“レベルが低い”（p122）と見なしてきたことが小説中に描かれている。王大頭の成績や容貌に抜きでた所がなかったことに加え、人生に對しても飲み食いとセックスができればそれで満足だという即物的態度を一貫して貫き、理想主義的態度を見せない點も、輕蔑の對象となっていたように思われる。また大學卒業時には、手堅く實質的な實入りが期待できる職業だとの理由で、わざわざ現場の警察官という職業を選択し、肩書きこそ立派だが實際に利益が入るとは限らない行政管理職に見向きもしなかったことも、當時は“愚か”（p14）な選擇だと二人から非難されていた。

しかし、『成都』においては王大頭のみが卒業後も順調な人生を送ってきたのであり、その事實に“オマエの金儲けは俺たちよりずっと樂だよな。リスクもなければ、智慧を絞る必要もない”（p122）と、資産家の李良も羨望の言葉を向ける。王大頭のリスクがない儲け<sup>23)</sup>とは例えば、違反取り締まりの對象となる一般庶民に對して、公權力をバックに威張り散らしては商賣道具を差し押さえ、時に見逃すことと引き替えに金品を要求するなど、庶民を金銭的「欲望」を満たすモノとして利用することを指すだろう。同時にまた、警察官である王大頭らが自身の違反を取り締まるということも、基本的にありえない。

利用する者とされる者、支配する者とされる者のヒエラルキー関係は、これまで状況に応じて入れ替わる可能性も残していたが、公権力を行使する立場にある者とそうでない者との関係は固定されており、ほとんど身分と言ってよいかもしれない。換言すれば、公権力を有する体制側は常に民間を利用する側にまわり、必ず利益を手にするよう、構造化されていると言えるだろう。社会的ヒエラルキーの上下関係の中で、上位が「欲望」を恣にして下位をモノとして「虚無」化し、徹底的に利用して痛めつける。痛めつけられた下位はその恨みを更なる下位に向け、己の小さな「欲望」の餌食とする。『成都』に描かれる「欲望」が興味深いのは、社会のヒエラルキーに個々の「欲望」が構造化されている現実を、赤裸々に露呈させているからに他ならない。

小説ラストでついに陳重自身が、下位をモノとして「虚無」に突き落とす暴力的「欲望」の餌食にされる。クリスマスイブの夜、陳重は偶然、かねて憧れていたスワッピングクラブの主催者と同席で飲むことになる。この男から王大頭のことを聞かれ、“途端に大膽な気持ち”になり、陳重は大頭との個人的関係を饒舌に語り出す。平素は警察官という職業を蛇蝎の如く嫌いながら、陳重はここでも大頭との関係が利用できそうだと計算するや、散々にそのことを吹聴し、旨い話に預かろうと張り切る。飲み明かしてから、男に“ウチへお連れしたい”（p243）と切り出され、自腹では行けそうもない高級クラブでの快樂を想像した陳重は、「欲望」を刺激され喜び勇んでついていく。

俺は目を輝かせ、妻同伴でなくてもいいのかと尋ねた。男は笑って、他の方はもちろんダメですが、あなたは王林〔＝王大頭〕のご友人ですから。俺はひどく誇らしく、内心、王大頭の輝かしいイメージを思い起こした。（p243）

自分がモノとして利用されるのは我慢ならないが、自分が利用するのは構わない。この極めてご都合主義的基準によって、王大頭のイメージは“國章をつけた禽獣”（p183）から“輝かしい”親友へと兩極端に分裂していく。

しかし、この男が陳重を誘惑した目的は、王大頭への敬意を表するためではない。3ヶ月前、王大頭ら警察にスワッピングクラブを封鎖された上、30萬元

を下らない資産を押収された恨みを、公權力に守られた王大頭本人ではなく、代償としてその親友に向けて晴らすためである。社会的上位から「虚無」化された内心の恨みは、自分より下位に向けてぶつける、という『成都』のパターンはここでも忠實に繰り返されているのが見て取れよう。小説ラストは、人気がない草むらで男達から集団リンチを受け瀕死の重傷を負った陳重が、イブの鐘の音を背景に、歡びに沸き立つ成都の賑わいとコントラストが示される中、ひっそりと息をひきとることが暗示されている。

このラストの場面に限らず、『成都』では小説全篇を通じて成都の賑わいの描寫が繰り返し現れており、いずれも“墓”に喩えられている。「欲望」を満たす快樂に湧く成都の賑わいの裏では、互いをモノとして利用しあい、時として相手を「虚無」へと突き落とす暴力が渦巻く。そして自分もまた、いつ「虚無」へ突き落とされるか分からない恐怖の現實がつきまとい、人々は「欲望」で己を騙しつつ、目の前の恐怖から必死に目を閉じている。誰もがいつかは確實に「虚無」、すなわち死へと向かう逃れられない道行きを、『成都』は同時代中國像として描いたと言えるだろう。

本論文は日本學術振興會科學研究費・若手研究 (B) 「21世紀中國大衆消費社會における文學現象の研究」(2007年度 課題番號 17720073、研究者代表：高屋亞希) による成果の一部である。

#### 注

- 1) 1974年生まれ、『成都』發表時に廣東の會社で管理職をつとめていたが、現在はフリーで創作活動に専念などの情報以外、實名や經歷など個人情報はほとんど明らかにされていない。
- 2) 原題は『成都，今夜請將我遺忘』。王鳴劍「現代都市里的欲望人生——試析《成都，今夜請將我遺忘》」(『重慶工商大學學報(社會科學版)』23卷5期、2006年10月)等によれば、「天涯」「新浪」「NET-BUGS」に掲載したとある。「神秘的網絡文學青年」(『中華讀書報』、2002年9月)で慕容雪村は記者からのインタビューに答え、3種のペンネームでこれら3箇所に原稿を發表したことがあり、慕容雪村のペンネームは「天涯」で使用したと語っている。なおまた李海鵬「慕容雪村：愈懷疑，愈藏匿」(『新聞週刊』、2002年10月7日)によると、連載が開始されたのは2002年4月5日のことで、2002年12月に內蒙古人民出版社から大結局完全版(筆者未見)が出版されるが、削除・改作部分があったとして、

2003年8月に百花洲文藝出版社出版、二十一世紀出版社發行で完全修正版が出版されたとする。本稿の分析は全てこの完全修正版に基づく。ネット上で公開されたのは30章まで（完全修訂版：全37章）で、姜楠「給網絡小説以文學的關照——評《成都，今夜請將我遺忘》」（『北京理工大學學報（社會科學版）』5卷5期、2003年10月）等では、結末をネット上に公開しなかった理由が海賊版に對應するためであった、という噂を紹介している。ネット上では讀者がそれぞれ書きかえた『成都』のさまざまなバージョンが出現し、混亂を引き起こしたと前掲の李海鵬も語っている。

- 3) 拙稿「孫睿“青春三部作”に見る「虚無」の位置づけ——〈存在の耐えられない軽さ〉への抗い」（早稲田大學中國文學會『中國文學研究』第32期、2006年12月）を参照のこと。
- 4) 『成都』の主人公の陳重は、1995年前後に大學卒業という設定になっている。
- 5) 注2前掲の李海鵬は、『成都』がポルノサイトに轉載されたり、單行本化された海賊版ではその種の小説とセットにされていたことを紹介している。
- 6) この抜擢は、本社への密告で元の支社長を追い落としたことに伴う後任人事。陳重は追い落としに直接關與していなかったものの、自分にとってもメリットがあると期待し、それを默認したという設定になっている。この新しい支社長との間で展開される主導權争いも、小説の主要なストーリーの一つであり、最終的に陳重は争いに敗れ、職場を追われることになる。
- 7) 元手の約1,000元をすぐに使い果たし、李良から借金して勝負を續けたという設定。李良にこの借金を返したかは小説では明らかではないが、普段より陳重は李良からこうした借金を繰り返しており、その累積は32,000元という高額にのぼる。また會社の公金284,000元あまりを私的に流用しており、小説のラストではそれが原因で會社から訴訟を起こされそうになる。陳重の「欲望」はこうした自身の經濟能力を超えた、ルーズな消費によって實現されている點は注意すべきであろう。
- 8) この點について注2前掲の王鳴劍は、人生で味わうちょっとした挫折や失意が、さまざまな女性の肉體で晴らされると指摘している。また姜飛は「“遺忘”：叙事話語と價值態度——評慕容雪村的網絡小説《成都，今夜請將我遺忘》」（『文藝理論與批評』、2003年2月）で、女性は單に叙述の道具として使われ、陳重の反省や懷疑を呼び起こす契機となった後は、その存在は悉く“忘れ去られる”と厳しく批評している。併せて姜飛は、陳重が放埒な欲望を恣にした後、そうした行爲への反省や懷疑が一瞬だけ現れ、その後はすぐに一切が“忘れ去られる（遺忘）”、といった繰り返りで『成都』が構成されている、と指摘している。
- 9) 陳重が大切な存在として愛情を向ける對象は妻に限られており、他の女性たちには肉體以外の關心を向けることはない。小説全體を通して妻への愛情は一貫しており、小説中盤で生じる離婚後もその點は變わらない。本稿で後述するように陳重の意識では、妻と「欲望」を向ける相手は社會的ヒエラルキーが嚴密に分かれている可能性が高い。
- 10) 大學の後輩で指折りの美人だった妻の趙悦と知り合うきっかけは、大學敷地内で戀人とセックスしようとしていたところを暴漢に見つかり、強姦されそうに

なっていた趙悦を、現場を通りかかった陳重と王大頭が助けたことによる。婚前セックスにまだ寛容ではなかった1990年代前半、事件が明るみになることは趙悦にとって致命的なことであり、後々まで彼女の負い目になっていたことが複数の記述から伺える。(p15等参照)

- 11) 結婚前、同棲していた農村出身の露天商の女性に對して陳重が別れ話を切り出した際、女性は一夜泣き明かしてから、妊娠した子供を墮胎するから金がある、と言って別れ話を受け入れたエピソードが見られる。(p26～27参照)
- 12) 陳重の離婚後すぐ、葉梅から電話がかかってくるが、長い沈黙の後、かけ違えたと言って電話を切るエピソード (p188参照) が描かれており、彼女が陳重からのアプローチを期待していたことが伺える。また李良とケンカした葉梅が男に電話をかけて出ていったという記述 (p101) もあり、彼女が救いを求めている相手は陳重一人ではなかったことも伺えよう。
- 13) 小説では二人の婚約までの経緯や具体的な結婚生活の詳細は描かれておらず、これ以上、葉梅の心情を推測することは困難である。破局後、李良が離婚には應じてよいが、一銭も支拂わないと發言している (p142参照) ことから、彼自身は葉梅が自分と敢えて結婚した理由を経済的なものと認識した可能性があるだろう。
- 14) この時点で、インポテンツであるとの告白はまだされていないが、李良が性的に問題を抱えているかもしれない、と陳重は薄々感づいている (p54～55参照) という設定になっている。李良自身がインポテンツを告白するのは、この露見からまもなくのことである。
- 15) 『成都』自序はミラン・クンデラの『裏切られた遺言』を引用し、神聖な精神的価値があるように見えるものの全てに値札がついており、買収できない人はないという人生觀が語られている。「欲望」による価値の「虚無」化が21世紀中國のクンデラ受容を支える文脈の一つとなっている可能性が伺えよう。尙、クンデラブームについては朱大可・張閔主編、高屋亞希・千田大介監譯『Chinese Culture Review (中國文化總覽)』vol.2 (好文出版、2005年10月) 文學事件10-8 (p31)、キーワード「昆德拉」(p258)を参照のこと。
- 16) 本稿では紙幅の関係で論じなかったが、李良との友情関係と同様、度重なる浮氣という妻を蔑ろにする行爲によって、妻との愛情関係が「虚無」化したり、職場での権力闘争でライバルを騙したり出し抜いたりする行爲によって、それまでであった信頼関係が「虚無」化していくのが、認められる。
- 17) 李良が大學時代から詩人の海子をアイドル視していたとの記述 (p185) がある。『成都』に限らず、1989年に自殺した海子をアイドル視する現象は廣く見られる。
- 18) 注15前掲書キーワード「民工索薪」(p263～264)では、未拂い賃金の支拂いを求める出稼ぎ労働者による抗議の暴力や自殺など、「流血の事態」が社會問題化していることが伺える。また朱大可・張閔主編『21世紀中國文化地圖 (2006年第5卷)』(吉林出版集團有限責任公司、2007年8月) キーワード「自殺秀」(p250)では、そうした出稼ぎ労働者の命がけの抗議が、單なる見せ物としか受けとめられなくなった状況を傳えている。
- 19) 都市管理局が露天商など都市の社會的弱者を取り締まることで生じる衝突や軋

慕容雪村『成都よ、今夜は俺を忘れてくれ』試論（高屋）〔59〕

轍は、廣く世間一般の非難の對象となっている。朱大可・張閔主編、高屋亞希・千田大介監譯『Chinese Culture Review（中國文化總覽）』vol.3（好文出版、2006年7月）キーワード「城管」（p202）およびvol.4（好文出版、2007年7月）キーワード「城管」（p158）参照のこと。

- 20) 例えば、上司に辭表を叩きつけ、これまで口に出来なかった不満や怒りを上司に直接ぶつける行為が賞賛の對象となる。注3 前掲の拙稿を参照のこと。
- 21) 陳重らの大學在學時にあたる。小説中には當時、大學キャンパスでもビジネスブームが吹き荒れたエピソードが描かれている。この時も學校當局の摘發で、順調な成功をおさめていた陳重のビジネスは「虚無」と化し、ひいては退學の危機に曝されるという結末を迎えている。
- 22) 理想主義的なクテマエが陳重の中でまだ生きていることを示すものであろう。陳重や李良は理想主義を信じていられた大學時代を肯定的に回顧している（p196等参照）ことが、小説全體で繰り返し記述されている。
- 23) 2007年に『成都』を映畫化するに際して、警察官である王大頭のダークな一面を描くこと等に對して、配給會社や映畫管理當局などから難色が示されたという。「城市，今夜請將我遺忘——與導演謝鳴曉一起解讀《成都，今夜請將我遺忘》（『世界電影之窗 | SCREEN』、2006年11月）等を参照のこと。